

ハイデ

(第二十七回)

津田芳雄譯

さつきからびつくりしてペーテルの様子を見てゐたハイデイが云つた。

「ペーテルは、この頃ぎうしてあんな風なの？まるで『トルコ人』が後から鞭で追つかけてられる時、そつくりね」

「おほかた、何ぞ身に覚えがあつて、誰かに鞭で追ひ立てられてるやうな氣がするのぢやらう」

おちいさんは答へた。

ペーテルは息もつかずに坂を一つ登り切つた。

それから、さこからも見えない所まで来るまで、立ち止まつて、心配さうにあたりを見まはし、急に跳び上つて、後から誰かに襟がみでも引つ摺まれ

たやうに、怖さうな顔をして振り返つた。いつ何さき、フランクフルトのお巡りさんが、しげみの後からやにはに掴みかかつて来るかもしれないと、びくびくしてゐるのである。不安が長びけば長びくだけ、怖さは一層ひきくなり、一刻も心の休まるひまがないのだつた。

ハイデイはおばあさまに、何もかもがきちんと整頓されてゐるさころを見ていたかどうか、せつせつ小屋ぢうを片付けはじめた。クララはその有様を、面白さうにながめてゐた。

朝のうちにはかうしてすぐに經つてしまひ、もういつおばあさまがいらしつてもいい様に、お支度

が出来上つた。子供たちはいゝ着物に着換へ、小屋の前に並んで腰をかけて、おばあさまをお待ちした。

おぢいさんはわざわざ自分で山へ行つて摘んで来た眞青なりんごうの、目の覺めるやうな花束を子供たちに見せてやり、それから又、中へ持つて這入つた。花束は美しく朝日に照り映え、子供たちは歡びの聲をあげた。ハイディはまだおばあさまの姿は見えないかき、何度も跳び上つて見たりした。

やつみのこきで、おばあさまの行列が、うねうねと登つて來るのが見え出した。その順序は、ハイディの思つてゐたまほりで、まづ先頭が案内人、その次ぎが白のお馬に乗つたおばあさま、一等うしろが、要心のよいおばあさまが山行きには缺かしたこきのない毛布や肩掛類を、しこたま背負ひ込んだ人夫。

行列はだんだん近付いて來て、たうさうつてべんまで來た。おばあさまは馬上から子供たちを眺めてゐるが、二人が竝んで腰かけてゐるのを見るに、急いで馬から飛び降りてびつくりして叫んだ。

「まあ、これはさうしたこきです、クララさうし

て寢椅子にねてゐないのです」

そばまで行き著かないうちに、又々驚いて手をひろげ、

「まあ、これがクララですつて？丸々ミ林檎のやうな頬つべたをしてるぢやありませんか。すつかり見違へてしまひましたよ」

おばあさまが抱き寄せようとするに、ハイディはすつと立つてクララに肩を貸し、二人で澄ましてさつきさき歩き出した。おばあさまは、今度はびつくりを通り越して、少し氣味がわるくなり出した。ハイディが何かさつてもないこきをもくろんで、いたづらをしてゐるにちがひないと思つたのである。

けれぎも、さうではなかつた——クララはほんたうに、ハイディと竝んで、まづすぐに、しつかりさ歩いてゐた——二人の子供たちはくびすを返し、眞紅な元氣な顔をして、おばあさまの方へやつて來た。うれしさに泣き笑ひしながら、おばあさまは駆け寄つてクララとハイディを代りばんこに抱きしめながら、しばらく口も利けなかつた。

そばでその有様をにこにこ眺めてゐるおぢいさんの姿に氣が付くに、おばあさまはクララの腕を

さつて一緒にそばまで行き、おぢいさんの手をさつて、うれしさに眼を輝かせながら、お禮を云つた。

「まあまあ、これは何さいふ有難いことでございます。みんなあなたのお蔭でございます。御親切な御世話さ、御心づくし——」

「なあに、結構なおてんごう様さ、山の空気がすわい」

おぢいさんは、にこにこしながらさへぎつた。

「さうよ、それからおいしいお乳のお蔭も忘れちゃいけないわ」

クララも口をはさんだ。

「おばあさま、さつてもおいくつてねえ、あたし、おばあさまがびつくりなさるくらゐ、いまだくのよ」

「さうでせうさああなたの頬つべたを見ればわかりますよ。すつかり見違へてしまひましたよ。こんなに元氣に太つて、背丈まで伸びたのですもの。ほんたうに思ひ掛けなくて、さても信じられない氣がしますよ。早速バリのお父さまに電報を打つて、すぐ呼びませうよ。みんなに喜ぶことせう。何さ云はないで、不意にびつくりさせ

てあげませうね。——あの、電報はここからはさういふ風にして打ちますんでせう。人夫たちは、もうお歸し下さいましたでせうね」

「歸しましたが、御急ぎならば、ペーテルを使ひに出しませう」

おばあさまは、一刻も早くこのよいしらせを息子に聞かせたかつたので、おぢいさんにお禮を云つて頼んだ。

おぢいさんは少しわきへ行き、指を口にあてて、一吹き高く口笛を吹いた。するこそそれははるか上の岩にひびきわたり、間もなくペーテルが聞き付けて、駆け降りて來た。ペーテルは、てつきりお巡りさんに引き渡されるので呼ばれたのだと思ひ込んで、幽靈のやうにまつ蒼な顔をしてゐた。ところが、何か書いたただの紙ぎれを渡されて、すぐにデルフリの郵便局まで行つて來いさ云はれただけだつた。おぢいさんはペーテルに澤山のお金を持たせてやるのは心もさないと思つたので、料金はあさで拂ふさ云はせた。

ペーテルはまづ助かつたさほつししながら、紙ぎれを持つて飛んで行つた。おぢいさんが今呼んだのがその爲めでなかつたさすれば、まだお巡り

さんが來てゐないことだけは確かだつたから。

さてみんなは楽しく小屋の前のテーブルのまはりに坐つて、御飯をいただいた。おばあさまはこれまでの出來事をすつかり詳しく聞かされた。おぢいさんがクララに、はじめは立つて見ることを、それからだんだん足を動かして見ることを、毎日少しづつおけいこさせたこと、山へ遊びに行く用意を整へてゐたら、急にその朝になつて、寢椅子が風に吹き飛ばされたこと、お花畑の美しさ、そしてそれを見たさの一念が、クララをはじめて歩けるやうにさせたこと、さうやつて、たうさう何もかもがだんだん順々によくなつて來たことなき。おばあさまは驚きと有難さに感きはまつて、しよつちう口をはさむので、お話はする分長くかつた。

「こんなことつて、あるのでせうか。夢ぢやないのでせうね。かうやつてお山の小屋に來てお話をしてゐるのは、ほんたうなんでせうか、あの丸々さ丈夫さうな顔をしてゐる子が、あれがこの間まで青い顔をしてゐた、うちの可哀さうな病身なクララなんでせうか。」

クララミハイディは、綿密に立てた計畫が常

つて、おばあさまがいつまでも驚いてゐるのが、大得意で、すつかり喜んでしまつた。

一方、ゼーゼマン氏の方でも、バリの用事をすませるさ、ひさつ不意に訪ねて行つてみんなをびつくりさせてやらうさ、おばあさまにも手紙一本出さないで、いきなり汽車でラガツ温泉へ行つた、ところが、ほんの二三時間前におばあさまが山へ登つたあさだつたので、すぎに馬車をやみつてデルフリまで行き、そこからの登り道が一等長くてゆつくり景色が眺められるだらうさ思つて、そこから歩いて登ることにした。

ところがその道は、思つた通り長いことは長かつたが、實に險しくて苦しかつた。ゼーゼマン氏はきんさん登つて行つたが、いくら行つても、ハイディに何度も聞いてゐる坂の途中にあるさいふペーテルの小屋らしいものに行き着かなかつた。人の足跡が勝手な方向にきこにでもついで居り、ゼーゼマン氏は道を間違へたのではないかと思つてあたりを見まはし、誰か訊ねる者はゐないかを探したが、人影ひみつ見えなかつた。

× × ×